

人文学・社会科学特別委員会（第31回 R8.7.17）に おける主な意見

令和8年8月4日

文部科学省研究振興局振興企画課学術企画室

<総論>

- 総花的になっているため、記載項目についてメリハリを付けるべき。
- 現在のAIはアルファベットで書かれたものが根元になっており、日本語等で書かれたデータが少ないため、我が国のデータを整備することを喫緊で進める必要がある。
- AIがどれだけ進歩しても、資料や人間社会の営みをアナログからデジタルへ変換する行為は依然として重要。デジタル化とはアナログに存在している社会、文化、地域課題を言語化する行為であり、コンピューター解析が発展した現代において人文学・社会科学がその役割を担っている。
- 素案の各箇所で述べられている課題が、AI for Scienceにおけるどの段階、種類の課題であるのかが分かりにくいいため、見取り図等で整理すべき。
- AIが学術研究全般に与える影響を整理したうえで、人文学・社会科学の特徴を二階建てで論じるべきではないか。また、研究へのAIの利活用は自然に進むと思われる中、なぜ政策が必要なのかを明確にする必要がある。
- AI for Scienceが最も期待されているのは、それによって新たな研究が生まれる可能性があることから、素案ではその点をより強調すべきであるし、実際の施策においてもそういった新たな研究の可能性を後押しすべき。

<3 AI for Scienceが人文学・社会科学にもたらす可能性>

- AIによって質的研究でできなかったことができるということは、すなわち量的研究ではないか。質的研究を専門にしている人が同意できる説明となっているのか確認すべき。
- 人文学・社会科学の質的研究は、研究者個人の解釈に大きく寄与するものではない。文学でも膨大な引用例に基づいて検証を行っており、AIはあくまで総量を増やすことでより透明性を高めるもの。データを見て、最終的に解釈を行うのは自然科学でも同様。
- 質的研究におけるAIの役割は、単なるデータ量を増加させるだけでなく、文脈理解によって新たな解釈の可能性や可能性を提示するところに価値がある。異なる視点や他地域の資料との比較を可能にし、研究者の理解を広げたり、新たな知見の発見を支援したりするところに意義がある。

<4 人文学・社会科学におけるAI for Scienceに関する課題 について>

- データを構築することを評価すべきなのは誰であるのかが分からない。
- AIの利活用が進むことが必ずしもコストの増加につながるとは限らない。研究にどのようなコストが生じているものなのか再構築が必要。
- 複雑な権利問題というのはどういうものか、法的な対応が可能なものなのか、文部科学省が検証すべき。
- AIの透明性の確保のためには、研究者の責任における検証・解釈だけでなく、人間の価値観による補正を行うことで適切なアウトプットにするという、Human in the loopの考え方が重要。その人間の価値観を明らかにするものが人文学・社会科学である。

<5 今後の方向性 について>

- 地域・市民の間に眠っている資料はほとんどデジタル化されていない。それらをデジタル化し、点でなく面として日本文化を捉えないと、AI for Scienceを次の段階に進めるうえで支障が起きる。
- 人文学・社会科学の価値が変わらないことの根拠が示されていない。
- 先進的な具体的事例を収集し展開することについて、誰が担うのか、国の施策として後押しする必要があるのか等踏み込んだ説明が必要。
- 人文学・社会科学の研究者においてAIやデジタルへの理解度には大きな差がある。そのため、機関による組織的なネットワークを構築して情報共有や人材育成を行う体制を整えることが必要。

<6 AIの進展に関わる今後の課題 について>

- AIと社会の関係、AIが人間の思考や行動に与える影響というものは、今後の課題ではなく、今実施すべきものとして整理すべき。